

鈴木信行・著  
『宝くじで1億円当たった  
人の末路』

(四八四字)

今日も一日ハードだった。たまにはゆっくり休みたいけど、ローンや教育費を思うとそうもいってられない。このまま自分は追い立てられて人生を終えるのか。せめて宝くじでも当たれば……などと妄想にふける人は多いが、では宝くじが当たれば人は幸せになれるのだろうか？ 本著はそんな素朴な疑問を、ビジネス誌副編集長が各分野の専門家に取材した注目のコラム集だ。

子どもをつくらなかった人、一生賃貸で暮らした人、海外を放浪した人、地方移住した人など、本著には「自分が選ばなかった人生」や「これから選ぶかもしれない人生」を歩んだ人の末路が登場する。例えば題名の件は一家離散や金銭感覚の崩壊、人生の目的喪失など悲惨な末路をたどる人が多い、とマネー専門家は証言する。またキラキラネームの人にはさまざまな苦難が待ち受けることや、留学で一発逆転を狙った人は借金まみれになりやすい、事故物件を借りると心身に支障をきたす人が多いなど、衝撃的な内容も多い。一方で一生賃貸の人、友だちがいない人、子どもがいない人などは、十分幸せな人生を過ごせることも分かる。

総じて「自分はこれでいいんだ」と心が軽くなる一冊だ。

(日経BP社・一四〇〇円十税)

川口俊和・著  
『コーヒーが冷めないうちに』

(四七九字)

「あの時こうしていたら」「もう一度あの日に戻れたら」と、誰もが一度は過去に戻ってやり直したいと思ったことがあるだろう。この本に登場する喫茶店は、コーヒーが冷めない間だけ自分が戻りたい過去に戻れるという、まさに奇跡のような体験ができる設定だ。

別れた恋人の気持ちを確認ために、アルツハイマーで自分のことを忘れる前の夫に会い、あるいは亡くなった妹の思いを知るために、さまざまな女性が過去へ戻ってその真意を探し、その時は気づかなかった深い絆に気づき、後悔し、感謝をする。

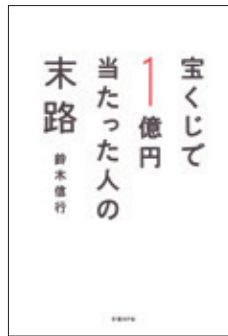
しかしどれだけ真意を知ったところで、今ある現実が変わらないというのもまた残酷な事実だ。記憶をなくした夫は妻を忘れ、亡くなった妹は生き返ることはない。ただし、過去へ戻って相手の真意を知ること、今の気持ちや生き方を変える女性たちの姿が印象的だ。

もちろん現実には、われわれが過去に戻るとは不可能だ。だからこそ、今を後悔しないように生きなくてはいけない。それはできそうでなかなかできないことだが、周りの人びとを思いやること、自分に正直に生きることがきつとその道しるべになるとこの本が気づかせてくれる。

(サンマーク出版・一三〇〇円十税)



『コーヒーが冷めないうちに』  
川口俊和・著  
サンマーク出版



『宝くじで1億円当たった  
人の末路』  
鈴木信行・著  
日経BP社

コトバの図書館

伏すこと久しきは、飛ぶこと必ず高し  
(五〇五字)

長い間うずくまって力を蓄えていた鳥は、いったん飛び立てば必ず高く舞い上がる。力をたくさん蓄えれば大きな成果が期待できる、という意味の言葉。

出典は中国の古典『菜根譚』で、内乱が相次ぎ人びとの心が荒れ果てた混乱期に、豊かな人生を歩むための指針として書かれたもの。処世訓の最高傑作と称され、松下幸之助や田中角栄、野村克也などのカリスマリダーが、こぞって座右の書に挙げることで知られる。この中に「長い間地に伏して力を蓄えていた鳥は必ず高く飛ぶことができ、ほかより先に咲いた花は散るのもまた早い。この道理さえ分かっていたら、道を見失って勢いをなくすことも、結果を焦って心惑わすこともない」という一節があり、困難に直面したときに心を奮い立たせる言葉として親しまれている。上半期は新体制づくりや新規開拓など、どうしても形にならない水面下の模索が多くなりがちだ。力いっぱいがんばっているのに結果を出せず、「自分は何をやっているのか」と途方に暮れたり、夏の暑さも手伝ってイライラがつのるころかもしれない。けれどどんな成功も、地道な作業を重ねてこそ、『菜根譚』の教えを胸に、いつか必ず飛べると信じて腐らず実績を積みたところだ。